



ボランティア養成講座、開催中。

本年度の養成講座の受講者は17名です。年齢や性別は様々ですが、〈自死にまつわる苦悩を抱えた方を支えたい〉という真剣な気持ちは同じです。なかには、二年前から受講したくても予定が合わずに断念し、今年になってやっと参加した方もいます。また、広島、富山といった遠方から通っている方もいて、その熱意には頭が下がります。

今回の第三期養成講座は、これまでと同じく全10回の講座ですが、講座の早い時期に連続二日間の集中研修と懇親会を行ないました。受講生は、集中研修を通して当センターの基本姿勢を納得し、大きな気付きを得ていたように思います。また、長時間にわたって空間を共にすることで、〈同じ目的を持った仲間〉という意識も芽生えたように感じました。

研修では、実際の電話相談を模したロールプレイでの体験学習を何度も何度もくりかえし行います。その中では、普段は見ることのない自分自身の様々な面が見えてきます。時には、予想外の自分が見えてくることで、辛い気持ちになり、涙することもあります。もちろん、そんな時には周りにいるみんなで涙する仲間にとっと寄り添います。厳しいことの多い講座ですが、受講者のコメントからは、仲間のあたたかさを感じてほっとできる場になりつつあることがうかがえます。

一人でも多くの受講者に当センターの姿勢を共有してもらえるよう、あと数回の講座を丁寧に運営したいと思います。当センターが自死にまつわる苦悩を抱えている方の居場所となるために、これからも研鑽を積んでまいります。

(代表 竹本了悟)

受講者のコメント

- ・ロールプレイで相談者役になり、話を聞いてもらうと本当にふっと楽になる。実感です。
- ・日頃と比べて自分が相手の話をきいていないが、またと比べて自分の素直な感情を無視していたか…。
- ・今やろうとしていることって、本当に難しい。実際にやらんとわからん。
- ・心が痛いです。なんか痛みます。ロールプレイを今まで軽視しすぎでした。
- ・最初はこわかったけれど、みんなと一緒に参加できてよかったです。周りのみんなに救われました。

自死問題における “科学知”と“生活知”

近代の社会を先導してきたものに、科学や技術の進歩があります。私たちの生活に対して今後ともそれらは大きな影響をおよぼし続けることでしょう。しかし科学知や技術への信頼、正当性への信念はこの限りではありません。未曾有な東電の原発事故が示したものは、人間がコントロールし切れない事柄への科学的挑戦が行きつく先の一つの姿であり、また科学以前の問題として遠大果敢な挑戦にしてはあまりにも杜撰でレイジーなコントロール感覚と管理構造の有様でした。無知なわれわれパンチョスも呆れるほどの、ドン・キホーテのお粗末な馬の手綱さばきと、無残をこえてむしろパロディックな落馬の姿でした。

この国の国是に「安心・安全な社会」づくりがあります。私自身も究極の自死対策は、この安心安全政策に行きつくのだと繰り返してきました。しかしとりわけ原発事故以来、この「安心」と「安全」が今まで以上に決定的に乖離してしまい、連字符的に簡単に「安心安全」と一言で言い放ってしまうことに胡瓜の葉の剛毛を手にした時のようなざらつき感を覚えます。専門家が科学的知見ないしは見解としてどれほど被爆のリスクは「安全」な範囲内だと説明しても、私たちは生活者の感覚からとても「安心」してその言葉を信頼することが難しくなっています。私の小さな双子の孫たちは、車のシートベルトのことをまだうまく言えずシーベルトつける、などと口走っています。笑うに笑えない悲しい体験です。“科学知”を体現する「安全」と、日常生活の体験・経験から立ちあがってくる“生活知”としての「安心」が、修復不可能なほど大きく引き裂かれてしまったのが今回の原発事故だと言っていいでしょう。

水俣病研究に半世紀をささげた故原田正純医師は常々「一番の専門家は患者さん」だと繰り返したそうです。当時、有機水銀中毒と食物連鎖の関係性に関する科学知は、患者さんおよびその家族の苦悩は言うまでもなくその発症メカニズムや症状さえも十分には解明しておらず、むしろ当事者としての患者さんの体験（生活知）を手掛かりとするしかなかったのです。私の場合、原田医師のこの言葉から思い出されるのはナラティブ・セラピーでよく言われる“無知のアプローチ”です。

セラピーという言葉はここでは少し横においておきましょう。ある専門家たちに言わせると、ここでの無知ということはクライアントの話についてセラピストがもっと深く知りたいという欲求を持つことであり、専門家といわれる人々はむしろクライアントから“教

えてもらう”立場にあるのだといいます。無知の姿勢とはセラピストの旺盛で純粋な関心や共感がその振る舞いから伝わってくるような態度・スタンスのことであるとも言っています。私個人の体験からは、「態度・スタンス」という多少なりとも自覚的、意識的な個人の構えや技術というより、その場のコミュニケーションの“雰囲気”として理解されるものだろうと思っています。

そこで無知のアプローチとは具体的にどのようなものだろうと、アンダーソンとゲーリシャンという専門家の説明をみると次の3点が重要らしいのです。

①「相手に対して」語るというより、「相手とともに」語るスタイル：

1人称と2人称の「汝と我」といった直線的コミュニケーションではなく、1人称複数の「わたしたち」という立場で循環するコミュニケーションを彼らは「対話モード」と呼びます。シンボリックに言えば、机をはさみ向かい合って相手に語るというよりも、横にならんで座りながらゆっくりと語りあう縁側での“茶飲み話し”のようなイメージでしょうか。

②「理解の途上にとどまり続けること」：

とどまり続けるとは、クライアントの語りを簡単に理解しない、わかろうとしないことだといいます。なぜなら、早わかりは新しい意味が生まれ物語が再構成されるチャンスをつぶすし、それだけではなく誤解や勘違いさえ生む可能性を大きくするからです。またクライアントの話にはまだ続きがあるし、語りきれてはいないのでとの思いから、私たちにはさらに旺盛な関心や共感といった寄り添いの振る舞いが引き起こされるのだというのです。

③ローカルな言葉の使用

クライアントの話をも専門用語に置き換えしないで、クライアントの使うローカルな言葉つまりその対話の場で使われる言葉で語りあうことが大切だといいます。精神科医療などで初心者支援スタッフによく見られるのは、クライアントの訴えや症状をすぐ特定の診断名や症状用語で置き換えてとらえようとする傾向です。私自身もよく体験しました。

こうして彼らは無知のアプローチは未熟さや知識が無いことではなく、一つの姿勢のことであり語りの変化に対応した「知」であることを強調します。

この無知のアプローチは、昨今自死対策やスクールカウンセリングなどでよく喧伝される「寄り添い」アプローチとも相当に重なる要素があります。生きにくい、苦しいと語る人に向き合うときの姿勢として強調される「寄り添い」ですが、この標語は技術知・専門知にとどまることなくまさに「無知のアプローチ」「クライアントこそ専門家である」といった、生活知により多大な関心を示すことを意味しているように思われます。

清水新二

しみずしんじ／当センター理事長。1947年生まれ。東京都精神医学総合研究所研究員、大阪市立大学講師・助教授、国立精神神経センター・精神保健研究所成人精神保健部部長を経て、2010年3月まで奈良女子大学教授。ハンガリー科学アカデミー社会学研究所客員研究員、米国Beth Israel Medical Center客員研究員、厚生省・WHO会議の専門委員なども務める。現在奈良女子大学名誉教授、大阪市自殺防止対策部会長。



『いじめの構造 —なぜ人が怪物になるのか』

ここ数日、いじめを受け自死した中学生のことが報道されている。連日のニュースを食い入るようにみている。自死した生徒は、「いじめを受けながら笑っていた」という。相談を受けていた教師も「じゃれあっていると思っていた」という。

なぜ彼は「笑っていた」のか。私には痛いほどよく分かる。同じ経験があるからだ。暴行による体の痛みにまして辛いこと。それは同級生・教師といった周囲の者に「いじめられている」と思われることだった。まるでいじめられてなどないように、まるで仲の良い友達と「じゃれあっている」かのように振る舞ったものである。薄ら笑いを浮かべながら、「平気なそぶり」をしたものである。「いじめられているみじめな自分」に耐えられなかったからだった。

文字通り「じゃれあっている」と理解した教師と、自死した中学生との間には、恐ろしいほどの気持ちの開きがある。その中学生は、本当に絶望を感じたことであろう。

ところで、周囲の者が「気づいていたら」、どうなっていたのであろうか。多くの生徒が暴行の現場を見ていたという。「あれはやりすぎだ」と多くの生徒がアンケートに答えている。しかし、誰も彼を救うことはできなかった。

気づいていない（と語る）教師。気づいていたが何もできなかった生徒。ここ数十年繰り返されてきたいじめ自殺の構図と全く同じである。どうして学校は、同じことを繰り返しつづけるのだろうか。

現在、政府が主導し進めている自死対策の標語は「誰もがゲートキーパー」である。ゲートキーパーとは、国民一人ひとりが、悩んでいる人に気づき、適切な機関につなげる、そのことによって少しでも自死を減らす、というものである。本当にそうなれば良いと思う。

しかし、実は「気づくこと」は難しい。そして「気づいた」としてもどうしようもない場合がある。中学生の自死は、その厳しい現実をあらためて突きつける。なぜ気づいていても誰も救うことができなかったのか、相談を受けていた教師も解決に動かないのか、そして、なぜ生徒は、いじめられていても学校に登校するのか。

これらの問いに対し本書の著者は、12年間もの集団生活を強いる日本の教育システムそのものに問題が内在することを指摘する。日本の社会で生きていく以上、決して逃れることのできない集団生活。「居場所」がなくても決して逃げるのが許されない教室。ここに問題があるという。つまり、教育の「仕組み」を変えないかぎり、何も変わらないのである。

ゲートキーパー制度は、国民一人ひとりに気づきをうながす。しかし、言い換えれば、「自分たち」の「気づき」や「善意」で解決しないさい、と言っているだけではないのか。気づきや善意が機能しない構造を改善するという国の役割を免罪しているだけではないのか。ゲートキーパー制度によって、国民一人ひとりに自死の苦悩の解決を任せてしまう前に、この国はやるべきことがあるのではないか。気づくことを求めるのであれば、気づいたことを表現できる環境づくり、コミュニケーションが機能する場づくりが前提ではないか。

現在、この事件について、自死対策の専門家からほとんど声があがっていない。情けないことである。さまざまなサインを発していた中学生に対し介入するポイントはなかったのか、また家族はもちろんのこと、クラスメイトなど遺された方へのケアといった内容は、従来の自死対策で盛んに議論されてきたはずの領域である。自戒を込めて、自死にまつわる苦悩を支える私たちこそが、真剣に考えていかなければならない。

(N.S.)

仮設住宅を巡回していると、玄関の前で、植木鉢の土を掘り返しているお婆さんがいらした。「何ですか？」とお尋ねすると、津波で流された自宅脇に生えていた、彼岸花の球根なのだという。それをわざわざ仮設住宅に持ち帰って、植えているところなのだそうだ。

津波の被害を受けた自宅から、草花を持ち帰り、仮設住宅の自室前に植え替える方はかなりおられるようだ。

ある男性は、自宅前に植えたひまわりを見ながら、仮設に暮らしてみると、そこには暮らしたなりの楽しみがあるのだと言う。

「仮設にいると見知った顔がいるから、部屋を開け放していても安心だ。」

「仮設に帰ってくると、ほっとする。」

そんな声も耳にするようになった。

仮設住宅が、少しずつ、その人の居場所になってきているようである。

そのうち、「ここが仮設じゃなかったらいいのに」という声も聞くようになった。その声色には、自分の居場所という大切なものを「仮設」のままにしておきたくないという、そんな印象を受けた。

震災から15ヵ月。仮設住宅に根付いていく草花と、仮設にお住いの方の姿が、どこか重なって見えた。

(ボランティア2期生 A.C.)

仮設住宅訪問活動の現場から
被災地ノート ⑧



活動報告

- 電話相談件数…121件（6月期）
- 相談活動委員会
グループ研修 6月4日（月）8名
- グリーンサポート委員会
語りあう会 6月14日（木）6名
- 啓発活動委員会
街頭活動6月15日（金）5名

今月のことば

「死ぬ」、と言われても「飲む」。

（『酔いがさめたら、うちに帰ろう。』鴨志田譲・講談社文庫）

寄付ご協力一覧（敬称略・順不同）2012年6月1日～6月30日

ご協力にこころより感謝いたします

浄土真宗本願寺派	出雲市・明圓寺（寄藤信子）	石野富美子	矢野利生
株式会社エクザム	桑名市・浄光寺（石本龍憲）	平島義仁	松山市・西福寺
葛野洋明	街頭募金にご協力いただいた皆様	岡崎秀磨	森直道
岩波久美子	株式会社福寿園（福井正典）	藤本弘子	大江眞
大橋覚音	柳井市・明教寺（隆野正信）	銚田市・教圓寺	霜尾孝紹
高橋彰子	旭川市・俊栄寺（畠山俊洋）	西義人	霜尾光江
西脇修見	三重県三重郡・光輪寺	坂原英見	笠松弘隆
堀祐彰	福岡県粕屋郡・信行寺	恵光寺	豊中市・専敬寺
金子宗孝	八代市・大法寺（大松龍昭）	船倉成之	高橋浩文
瑞穂市・浄明寺	岐阜市・法久寺（本田龍司）	鈴木善隆	堀江成典
板垣正雄	呉市・宝徳寺（平原弘史）	前田利宗	梅原正英
荻野昭裕	広島市・万福寺（前寺哲信）	丘山新	上越市・正福寺
武田慶之	京都市・雲晴寺	藤大慶	
安楽寺	武蔵野市・源正寺太子堂（上杉泰頭）	大田垣聖圓	



●支援方法

賛助会員 年間1口3,000円
寄 付 金額は問いません
法人会員 年間1口10,000円

●会費・寄付金振り込み先

郵便局 ゆうちょ銀行[振替口座] 00950-0-271875
他行間 ゆうちょ銀行[当座] ^{ゼロキョウキョウ} ○九九店 0271875

Sotto コメント

祇園祭真っ最中の京都です。夕暮れの四糸烏丸をそぞろ歩くとき、オレンジ色の提灯が街に映え、「コンチキチン」とお囃子がどこからともなく聞こえてきます。タダ！でちょっと贅沢な気分を味わえます。

(N.Y.)

発行 2012年7月

特定非営利活動法人 京都自死・自殺相談センター事務局
〒600-8349 京都市下京区西中筋通花屋町下ル堺町 92
TEL 075-365-1600
URL <http://www.kyoto-jsc.jp>
E-mail so-dan@kyoto-jsc.jp